同志社の伝統を受け継いだ社会事業家-留岡幸助・山室軍平・中村遙の生き方-

井上 勝也	同志社大学名誉教授
講師紹介〔いのうえ・かつや〕	

同志社の伝統

ただいまご紹介いただきました井上勝也でございます。今日は「同志社の伝統を受け継いだ社会事業家-留岡幸助・山室軍平・中村遙の生き方-」という題でお話しいたします。私は一九五四年に同志社大学文学部に入学して、二〇〇四年まで五十年間、学生として、また教師として同志社と共に歩んでまいりまして、後輩である若い皆さんに創立者新島襄の生き方・教育思想を授業やこのDoshisha Spirit Weekでお話ししてまいりました。今日は同志社が輩出した社会事業家を三人ご紹介し、彼らが社会事業を畢生（ひっせい）の事業に選んだ理由と彼らの生き方に言及したいと思います。
まず、社会事業というのは皆さんに耳慣れない言葉ですが、現在では社会福祉という言い方をします。それでは、今日の題名に「同志社の伝統を受け継いだ」と書きましたので、総論としてまず彼ら三人の受け継いだ「同志社の伝統」を申しあげます。
同志社の伝統はもちろん創立者新島襄によってつくられ、それが歴代の学生によって受け継がれてきたものでありまして、新島のキリスト教観あるいは人間観・教育観がその中核を占めるということができましょう。したがって新島がどのようにして彼のキリスト教観・人間観・教育観を構築したかを最初に申しあげます。

人間を大切に教育を大切に

新島は一八四三（天保十四）年、安中藩の下級武士の長男として江戸で生まれ育ちました。彼の青少年期はいわゆる幕末で、国内では幕藩体制が崩壊寸前であり、国外では一八四〇年に清国でアヘン戦争が起こり、我国も列強の侵略を受ける可能性が増していました。当時の日本は国家存亡の秋（とき）であったといえます。新島が国禁を犯して密航を企てたのは幕府が崩壊する三年前の一八六四（元治元）年で、ちょうど一年かかってアメリカの東海岸ボストンに着いています。彼の密航の目的は封建的桎梏（しっこく）（pressure）から逃がれたい、キリスト教を自由に学びたい、近代的な学問を学んで、国家の改革者になりたいということでありまして、彼は江戸とは全く異質の文化圏でありますニューイングランドに飛び込んでいきました。彼の関心は五階建てのビルディングやスクリューで動く蒸気船やあるいは遠くまで飛ぶ大砲の製造といった、いわゆる文明にはなく、むしろそれらを造り出した人間に目を向けているのです。彼はニューイングランドに着いて、一年八ヵ月経った一八六七年三月、父親宛に大変長い手紙を書いています。彼が二十四歳のときですが、この手紙で注目されるのは、彼が学んでいるフィリップス・アカデミーと同じキャンパスにあるアンドーヴァー神学校の学生が非常に品行方正で、日夜聖書を読み、祈り、自分を磨き向上しようとしているというところです。その次にフィリップス・アカデミーの校長もアンドーヴァー神学校の教授も、道で出会うと向こうから近づいてきて、「新島さん、今日は如何ござあるや」といって、目上の校長さんの方から生徒である自分に歩み寄って握手を求めるというのです。「三尺下って師の影を踏まず」の縦社会で二十一年間生活した新島にとって、横社会すなわち人間平等主義（democracy）をお父さんにわかってもらおうとしているのです。これは彼にとっては大きな価値観の転換になります。それから面白いのは、家の中にストーブがあって、煙が部屋に充満しないといっています。次に各戸には避雷針が付いているので、雷が落ちても火事にはならないと申しています。また小さい溝には蓋がしてあるので、子どもが落ちて流されることはないとも書いています。要するに新島の視点は庶民の生活に目を向け、ニューイングランドの人たちは命の大切さ、生活の快適さを求めているというのです。
まだあります。新島が住んでいるアンドーヴァーという田舎町にちゃんと自由学校があって、読み書きができない子どもはいないというのです。彼はfree schoolを自由学校と直訳していますが、これは義務教育制のもとですべての子どもが無月謝で学べる学校という意味です。それからアンドーヴァーにはフィリップス・アカデミーという男子の中等教育機関と、アボット・アカデミーという女子の中等教育機関と、アンドーヴァー神学校という高等専門教育機関がいずれも私立で存在し、町を挙げて教育に熱心だというのです。新島の目の付け所は鋭いですね。アメリカという国は人間を大切にし、教育を大切にする国であるというのです。

キリスト教の真髄をつかむ

それからもう一つ大きな特徴は、キリスト教です。新島のように無一文で裸一貫で極東からやってきた異邦人にも、彼の人物を見込んで生活費も学費も一切出してくれる人が現われました。彼の恩人になるハーディー（Alpheus Hardy）です。また彼のホームステイ先のヒドゥンさんも教会の人たちも皆彼に大変親切である。彼らはキリスト教徒としての生活に励み、キリスト教が人びとの生き方、考え方を規定している。自分たちと同じ神を信ずる新島を兄弟として温かく受け入れてくれることを、新島は日々実感するのです。
さて、新島の密航の理由の一つにキリスト教を自由に学びたいというのがありました。江戸ではキリスト教を自由に学ぶことができませんでしたので、彼はひそかに家族にも隠れてキリスト教関係の書物をかなり読んでいました。彼はアメリカへの密航の途中に香港で漢訳聖書を買い求め、むさぼり読んでいまして、ヨハネ伝三章一六節の「神はその独り子を賜ふほどにこの世を愛し給へり、すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり」（原漢文）に出くわして、この一節に生涯最も深い感銘を受け、これぞ福音の精髄であると思った、というのです。第二次大戦中、自由主義者として東京大学を追われ、戦後東大の総長になった矢内原忠雄はヨハネ伝の注釈書を書いていまして、この聖句を次のように解釈しています。「神は世界を全体として愛し給ふだけでなく、世の隅々の如何に小さき一人一人をも愛し給ひ、如何なる経歴、如何なる性格、如何なる罪人たるを問はず、すべて誰でもイエスを信ずる者にはその信仰の故によりて神の子たる力を与え、永遠の生命を賜ひ、これを滅亡より救い給うのである」（聖書講義『ヨハネ伝』七二ページ）。新島が、新約聖書の精神を最も象徴的に述べているこの聖句を発見したということは、単に直感ではない、かなりキリスト教の真髄をつかむだけの予備知識をもっていたのではないかと私は思います。

福音宣教と自立のための教育

さて、極東からやってきた新島にもイエスを信ずる者には神の子たる力を与えてくださり、永遠の命を与えてくださり、滅亡から救ってくださるのだというこの聖句は、大きな励ましになりました。異邦人である新島もイエスを信ずる者として、ニューイングランドの人びとから兄弟として大切にされることを日常的に体験しているからです。
新島はフィリップス・アカデミーを卒業して、典型的なリベラル・アーツ・カレッジであるアマースト・カレッジに三年間在学します。このカレッジはピューリタンの信仰を堅持するために「敬虔の念（piety）と才能をもった貧しい青年を牧師にする」ことを目標に建てられた大学で、キリスト教を自己の宗教観・人間観・世界観の中核に据えたトータルな人間、木を見て森も見ることのできる人間、自立心が強く、地方や国家の牽引車になるような人間を育成する大学なのです。医者をつくる、法律家をつくる、教師をつくる、政治家をつくる前に、専門職業教育の土台として必要な人間教育をするカレッジなのです。彼はフィリップス・アカデミー在学中に洗礼を受けて正式なクリスチャンになっていましたが、歴代の卒業生の四十パーセントがキリスト教の伝道者になるこのカレッジに入学するなり、ミショナリー・バンドという学生団体に入りました。すなわちこの時点で彼は、将来キリスト教の伝道者になろうと考えていることがわかります。彼は在学中に、自分で正邪善悪を判断する自立心をもった人間や地方や国家のリーダーになる人間になるには、知育も徳育も体育もバランスよく学ぶことが大切であることを学びとりました。彼はこのカレッジを卒業してアンドーヴァー神学校でニューイングランド神学を研究し、その間一年余り岩倉使節団の随員として米欧八ヵ国の教育施設や制度を調査しました。
一八六五年七月以来、一八七四年十月まで九年間の米・欧での生活で新島が得た結論は、日本を近代化するにはキリスト教を日本に宣教すること、国民を自立した国民にするには教育の力、とりわけ大学教育が重要であること、それから人間が生活する社会、国家の体制はデモクラシーが望ましいと考えるに至りました。
一八七四（明治七）年十一月に十年ぶりに帰国した新島は早速キリスト教の宣教を始め、翌年の一八七五年十一月には京都の地に同志社英学校を開校し、将来大学に発展させることを考えていました。

人への奉仕こそ神への奉仕

さて、二十一歳の新島が三十二歳になって帰国し、同志社英学校で実践した教育が、そして教育者新島襄の生きざまが、慶応や早稲田とは異なって社会の底辺にあって困っている人、苦しんでいる人に手を差し伸べることを生涯の仕事に選ぶ卒業生を同志社から多く輩出することにつながるのです。この事実を検証するために、もう一度新島がニューイングランドで学びとったものを整理しますと、当地で彼に救いの手を差し伸べた人びとはピューリタンと呼ばれ、なかでも一六二〇年メイフラワー号に乗って信仰の自由を求めて新天地にやってきたコングリゲーショナリスト、すなわち会衆派教会に属する人びとの末裔でありました。この教会の教義は、現実社会で神の意志を追求し、神の栄光を実現させる実践活動を重んじ、具体的には貧困や病気に苦しむ人びと、虐げられている人びとに対して救済の手を差し伸べようとすることが特徴です。新島がニューイングランドで体得したキリスト教がこのような特徴をもっていたことに加えて、彼が学んだフィリップス・アカデミーの教育信条が“Non Sibi”すなわち「自分自身のためでなく」であり、次に入学したアマースト・カレッジの信条が“Terras Irradient”すなわち「世界を照らせ」でありました。このようなキリスト教観と教育観、使命感をもって帰国した新島は、彼の信ずるキリスト教と彼の思想を同志社英学校で当時の生徒たちに積極的に伝えました。明治十年代から二十年代の同志社英学校の卒業生たちが、彼らの受けた教育について思い出を語っています。一八七九（明治十二）年同志社英学校に入学し、後年早稲田大学の教授となってキリスト教人道主義の立場から社会主義を唱えた安部磯雄は彼の著者『社会主義者となるまで』のなかで、新島校長から次のようなエピソードを聞いたと書いています。それは新島がアメリカ留学中、ボストンの街を歩いていたとき、一人の婦人が道を横切ろうとして、疾走してきた馬車にひかれそうになった。傍らを歩いていた男性がすばやくその婦人を抱きとめたので事なきを得たが、やがて婦人の夫と思われる人がやってきて、その男性に“You are a gentleman!”といって感謝したというのです。新島はこの例を紹介しながら、紳士とは人のために奉仕する人のことをいうのだと教えたという。安部はこのように書いた後「こんな精神で同志社の学生は薫陶されたのである」（同書　八四ページ）と結んでいます。新島在世中の同志社には、人への奉仕こそ神への奉仕であり、社会事業は神の委託事業であるといった考え方が支配的であり、新島はしばしば「世の中のため」という表現を用い、応用的キリスト教（applied Christianity）、すなわちキリスト教の応用的実践活動を重んじたというのです。新島は、神様の前ではすべての人間が平等であるといった人間平等主義を、日常生活のなかで実践していました。彼が用務員の松本五平さんを「さん」づけで呼んだ話は有名です。

イエスの心を生きる

新島は徹底的にイエスの心を心として生きた人でした。高き志の実現に激しい情熱を燃やし、忍耐強く、誠実で他者を思う心が豊かでした。彼は生徒の価値可能性を信じ、個性を大切にし、クラスで一番出来の悪い生徒に特別の注意を払い、彼らを極みまで愛する教育者でした。このような人間・キリスト者・教育者新島の背中を見て当時の生徒たちは成長していったのです。教育というのは、教師と生徒・学生の間の強い信頼があって初めて可能になります。新島校長と当時の生徒の間には強い信頼関係があり、新島の言動が生徒たちの人間形成に大きな影響を及ぼしました。彼のいう「世の中のため」になるようにという言葉が、いつの間にか生徒のものの見方・考え方・生き方を規定するようになったということができます。日々空気のように吸っているものが、その人の人間観をつくるのです。これで今日のお話の総論を終えまして、いよいよ各論に移ります。

留岡幸助の生涯と働き

各論として最初に取り挙げますのは留岡幸助です。一八八八（明治二十一）年に同志社英学校を卒業しました留岡幸助（一八六四―一九三四）は、明治・大正・昭和の初めにかけて活躍した我が国の社会事業の開拓者的存在です。彼は明治・大正といった社会事業の草創期に社会事業の根本問題を研究し、著書、論文を始め機関紙「人道」を通して、また内務省の嘱託として全国各地で講演活動をおこない、自らも実践することを通して社会事業の必要性を四十年以上にわたって世の識者や民衆に訴え続けました。社会事業というのは監獄改良―当時の監獄、今の刑務所は劣悪な条件のもとにありましたので、それを改善するとともに受刑者を人間として取り扱うべきことを主張しました。免囚保護―刑を終えて社会に出てきた人たちを免囚といいますが、これらの人びとに住む場所や職業を紹介し、自立を促すこと、それから不良少年感化事業―現在は非行少年といいますが、彼らを教育して立ち直らせ、再び犯罪に走らない意志の強い少年にすること、それから地方改良事業―これはとりわけ被差別部落の劣悪な環境を改善するとともに、日露戦争後の農村の疲弊から立ち直らせること、このような事業を留岡は七十年の生涯の間に積極的に推し進め、困っている人、虐げられている人、差別を受けている人に救いの手を差し伸べることに生き甲斐を見いだしました。私は留岡の生涯と働きを調べまして、結局彼が同志社で学んだことが大きな動機になったように思います。彼が同志社英学校別科神学科に入学しましたのは一八八五（明治十八）年でありまして、二十一歳のときです。当時同志社には後ほど申しあげます山室軍平がいみじくも申しましたように、「同志社スピリット」すなわち神を愛し、人を愛し、そのために「凡ての者の僕（しもべ）として奉仕するキリスト教精神」が学内に満ちていました。留岡は晩年「余を語る」という随想のなかで、「・・・殊（コト）に同志社在学中、人間社会には二つの暗黒面、即ち一つは遊郭、一つは監獄のあることを知るに至ったのは、私が社会問題に逢着した最初のもので、これが引き続いて今に至るまで多くの影響を私に及ぼしている」（『留岡幸助著作集』４　五三二ページ）と述べています。彼は同志社在学中に彼のキリスト教的世界観、人間観を深め、彼の七十年の生涯の方向性を固め、その後の彼は畢生の事業の実現のためにひたすら歩み続けることになりました。

留岡は一八八八（明治二十一）年、英学校を卒業後、一時牧師を勤めますが、一八九一（明治二十四）年、北海道空知の集治監すなわち刑務所の教誨師（きょうかいし）―受刑者を教え諭す宗教家―になりました。彼は受刑者の犯罪歴を調べているうちに、彼らが少年期に最初に犯罪を犯した時点で徹底的に教育して立ち直らせたならば重罪犯として北海道に送られなくても済んだという確信を得て、彼は犯罪少年の教育が最も進んでいるアメリカに留学することを決意しました。彼が行った所はマサチューセッツ州のコンコードとニューヨーク州のエルマイラにある少年院（reformatory）であります。彼は非行少年と共に作業教育を受け、非行少年教育の理論と方法を学びました。私は留岡幸助を研究するために一九七七年、エルマイラの少年院を訪れ、中を見学することができました。留岡がアメリカに行った明治二十七年という時代の日本では、まだ刑務所と少年院が分けられておらず、少年も大人の刑務所に入れられていたために、ますます悪くなるという実態がありました。これに対してアメリカの非行少年のための施設は懲罰の牢獄ではなく、あくまで少年を立ち直らせるための学校であり、日本の刑務所では受刑者は通し番号をつけて呼ばれていたのに対して、アメリカではMr.をつけて呼ばれ、人間扱いされていることを留岡は目の当たりにするのです。日本では苦役本分論といって、悪いことをした者は苦しみを受けることが当然であるといった考え方が当時支配的であったのに対して、キリスト教社会のアメリカでは犯罪者は表面は汚れている場合があっても、悔い改めるならば神さまは汚れをぬぐい去って赦してくださる、立ち直りを手助けしてくださるといった考え方に留岡は共感し、ちょうど二年間の留学を終えて一八九六（明治二十九）年に帰国しました。彼は明治三十二年、東京の巣鴨に家庭学校という名称の非行少年のための学校をつくりました。当時は感化院という名称が一般的であったのに対し、home schoolすなわち家庭のもつ要素を備えた学校をつくることによって、親の愛情に飢えた少年たちを立ち直らせようとするのです。

留岡は同志社在学中に応用的キリスト教、すなわちキリスト教精神に基づく実践活動の重要性を体得し、刑務所で自由を奪われて呻吟している受刑者たち、あるいは親や社会から見離され、街を彷徨する非行少年に手を差し伸べ、彼らを立ち直らせようとするとき、彼らが現実に生きる社会も合わせて良くしなければならない、人間と社会の両方が改善されて初めて地上に神の国を建設することができると考えました。彼が地方改良事業の実験地として一九一四（大正三）年、北海道遠軽に一〇〇〇町歩（ちょうぶ）の原生林の払い下げを受け、自然の教育力を一〇〇パーセント利用した家庭学校の分校をつくりました。満五十歳にして自ら鍬を持って開拓事業に従事する彼を理想主義者という言葉で片付けられないものがあります。留岡は“This one thing I do.”を「一路白頭に到る」と訳して座右の銘にし、ひたすら自分の信ずる道を歩み続けました。彼の七十年の生涯を顧みるとき、彼が同志社での三年間に人間社会には二つの暗黒面、すなわち遊郭と監獄のあることを知ったこと、そしてキリスト教は個人の心の問題にとどまらず、社会の底辺にあって苦しんでいる同胞に手を差し伸べるべきとすることを学んで、彼はそれの実践に生き甲斐を見いだしたということができると思います。

山室軍平の生涯と働き

次に山室軍平に移ります。山室軍平（一八七二－一九四〇）は明治・大正・昭和前期の社会事業家・宗教家であり、救世軍（Salvation Army）の日本司令官として免囚保護、廃娼運動、日露戦争後の不況対策としての労働紹介所の設置、結核患者を収容するサナトリウムの開設、凶作地農民の救援、関東大震災後の被災者の救援など、生涯を弱者の救済に捧げた人物です。この山室は明治二十二年から二十七年まで五年間、同志社普通学校に学びながら、卒業を間近に控えて退学しました。彼も留岡と同じく同志社在学中に学んだことが、その後の生涯に深く影響を及ぼしたということができます。

山室は留岡の出身地である岡山県高梁（たかはし）からさらに汽車で一時間ほど内陸に入った新見市の近くで生まれ、十四歳のときに上京し、築地の活版製造所の職工として働きました。翌年キリスト教の路傍伝道に従事し、その後福音教会系の築地教会に通うようになり、明治二十一年に洗礼を受けて正式なクリスチャンになりました。彼が十六歳のときです。将来キリスト教の伝道師になるために彼は伝道学校に入り、教会の青年会の幹事として、『将来之日本』を刊行し、『国民之友』という雑誌を発行して当時若者たちに人気の高かった徳富蘇峰に講演を依頼しました。蘇峰は「品行」という題の演説のなかで「京都の新島襄という先生が真の品行を有する人物である」という話をしまして、山室は感激し、ぜひ新島に会ってみたいという願望を抱くに至りました。そのころ京都の同志社で日本キリスト教青年会の夏季学校が開かれることを知り、彼は一八八九（明治二十二）年六月、十二日間の修養会に東京からはるばる参加しました。七月四日、新島校長は「夏季学校に就いての所感」と題する短い講演をし、次のように述べています。「明治維新の改革は青年の手によって成された。其の如く神の国を建設する大業もまた青年の力に待つ所が最も多い。けれども数多の薪が集まれば勢はげしく炎上する。其の如く諸君もまた協心戮力（リクリョク）（心を合せ力を合せること）、以て同胞の救いの為に戦はねばならない」（三吉明著『山室軍平』四五ページ）。山室は新島のスピーチに心を打たれ、同志社で学ぶことを決意しました。同年九月、彼は同志社普通学校に入学しましたが、もともと学費、生活費の見込みはなく、いわゆる苦学生としての生活が始まりました。同志社の先輩で、当時コリント前書第一三章の「愛」を実践していた吉田清太郎が、山室のために自分の学費や食費を与え、自らは死んだ猫の肉を食い、御所の椋の木になる黒く熟した実を食べて飢えをしのぐのです。また山室の同級生たちは彼が食堂でアルバイトをする分のお金を集めて彼に勉学の時間を作ってくれました。先ほども引用しましたが、後年山室は、彼の在学中の同志社には「同志社スピリット」－神を愛し、人を愛し、そのために「凡ての者の僕」となって奉仕するキリスト教精神が満ちていたと申しています。苦学生の山室は、先輩や同級生の友情に支えられて応用的キリスト教を学びとっていくのです。先ほどの吉田清太郎が最晩年の新島に会って、山室のことを話すと、新島が「どうかその青年にまだ若いからしっかりやれと伝言して下さい」（『私の青年時代』五五－五六ページ）と言われたことを山室に伝えると、彼は大変感動したという。山室は彼の自叙伝である『私の青年時代』で「此の先生（新島）が特に私の為に語られた唯一の金言として私は有難くこれを拝承し、四十年を経た今日も尚これを『まだ未熟だからしっかりやれ』といふ意味に解して、先生の忠告を重んじたいと心がけて居る」（同右五六ページ）と述べています。山室が同志社に入学したのは明治二十二年九月で、新島は翌二十三年一月に亡くなりますので、実際は新島とこの間直接に交わる機会はなかったと思われます。しかし十八歳の山室にとって新島の棺を担いだことを光栄に思っていますし、彼は『同志社文学会雑誌』三十一号（一八九〇年三月）に載せた「新島先生ヲ吊（トムラ）フノ文」の最後を次のような文章で締めくくっています。「此ニ謹ンデ信者ノ模範タル新島先生肉体ノ死ヲ吊（トムラ）ヒ又タ謹ンデ其遺志ヲ継ガンコトヲ其在天ノ霊ニ誓フ」（『山室軍平の研究』一〇〇ページ）。

一八九一（明治二十四）年十月、岐阜、名古屋方面に大きな地震が起き、死者七千人余りを出しました。濃尾大地震です。同志社からも教授や学生の救援隊が派遣され、山室ももちろん現地に救援に駆け付けました。彼は明治二十年、岡山孤児院を設立した石井十次と共に震災で孤児になった子どもたちの救済に奔走しています。一八九四（明治二十七）年、山室は同志社を退学しますが、石井十次の孤児院を助け、留岡幸助が受洗した高梁教会で伝道活動をおこない、一八九五（明治二十八）年上京し、救世軍に入隊、彼の華々しい活動が続けられます。彼は一九〇〇（明治三十三）年、廃娼運動を開始、遊郭に乗り込んでいき、用心棒に襲撃されて負傷しています。彼は、社会福祉学科に長年お勤めであった小倉襄二先生がよく言われた「底辺に向かう志」を強くもった人物でありました。同志社のクラーク記念館の二階の壁に山室のタブレットがはめ込まれています。そこには「神ト人道トノ為メニ　山室軍平　1889-1894」と刻まれています。

中村遙の生涯と働き

それでは最後に中村遙に移ります。中村遙（一九〇三－一九七七）は一九〇三（明治三十六）年、京都府丹後の峰山の生まれで、一九一六（大正五）年、同志社中学の三年に編入学し、苦学生としてアルバイトと勉学を両立させました。同中時代に早くも将来の中村遙を垣間見るような理想に燃え、社会の不正を厳しく批判する生徒でありました。彼は在学中「同志社改造団」の団長になり、カンニングをやめよう、酒・煙草をやめ、純潔な生活をしようと彼の雄弁を用いて生徒たちに訴えました。多くの記録には彼の弁舌は群を抜いており、彼の大学時代の一九二八（昭和三）年、同志社騒動のときの彼は「舌端火を吹く雄弁」という表現が使われています。中村の同中時代は大正デモクラシーの雰囲気が漂い、チャペルでは「憲政の神様」と呼ばれた尾崎行雄や、神戸市新川のスラムに自ら住み込んで貧困問題に取り組んでいた伝道者・キリスト教社会事業家の賀川豊彦らが演説し、少年たちの正義感を強め、現実社会を見る目を培ったということができます。また毎朝のチャペルで聖書が読まれ、「己を愛する如く、汝の隣り人を愛せよ」（マタイ伝　一九―一九）や「受けるよりは与える方が幸いである」（使徒行伝　二〇－三五）といった聖句が多情多感な生徒たちの心に浸透していきました。中村は同志社中学卒業の直前、一九二二（大正十一）年二月、同志社教会で海老名弾正牧師より洗礼を受けました。彼は三月に卒業し、政治家を志して上京、日本大学の予科に入学しますが、身体をこわして郷里で三年間療養後一九二七（昭和二）年、同志社大学文学部神学科に入学しました。在学中の三年間は中村の世界観を始め畢生の事業による社会事業の理論と実践の方法を学んだ時期でもあったといえます。

中村在学中の同志社は海老名弾正が総長でしたが、一九二八（昭和三）年十一月御所での天皇即位式の直後に有終館で失火があり、その責任をとって総長は辞任を迫られ、一九二九

（昭和四）年、恩師中島重（しげる）教授を擁護して学園紛争が起きたとき、正義派の中村はチャペルで演説をおこない、当時の獅子奮迅の姿は多くの学生や教授たちに強烈な印象を与えました。中島教授は当時「イエスの宗教は単なる個人の救いの宗教ではない、あくまで実践的な倫理的、社会的宗教である」と説いて社会的キリスト教を提唱し、また中心になって「同志社労働ミッション」をつくり、学生の間で影響力の大きい教授でありました。
中村は一九三〇（昭和五）年、神学科を卒業し、堺組合教会の伝道師を勤め、生涯のよき伴侶になる八重子夫人と結婚しました。彼の社会的キリスト教がいよいよ実行に移されるときがきました。一九三一（昭和六）年、大阪港の安治川河口に集まってくる無数の艀（はしけ）に住む子どもたちは半数近くが無就学で、時には海に落ちておぼれ死ぬ子どもたちもおり、彼らを何とか助け、学校に行かせたいという人間愛にかられて、中村は水上隣保館を建て、子どもたちを預り、養育する仕事を始めました。戦争末期の空襲でこの隣保館は焼失しましたが、彼は戦後は主に戦災孤児を中心に隣保館活動を続けました。一九五一（昭和二十六）年彼は現在の大山崎の山麓に児童養護施設・乳児院・保育所・幼稚園をつくり一九七一（昭和四十六）年には社会福祉に携わる人材の育成機関としてキリスト教保育専門学院を設立しました。この学校の頭にキリスト教がついています。使命感をもった、人間愛の豊かな、共に喜び、共に悲しむことのできる専門家を育成したいという中村の願望が示されています。
私が中村の生涯をたどっていまして驚いたのは、彼がアフリカのガボン共和国にＡ・シュバイツアーのつくった病院へ行き、シュバイツアーのお墓に参っていることです。一九七〇（昭和四十五）年、彼の六十七歳のときです。ちなみに留岡幸助も明治三十年代に彼の敬愛するペスタロッチーのお墓に参るためにスイスに行っています。中村は一九七七（昭和五十二）年肝硬変症で亡くなりました。七十三歳です。私は亡くなる一週間前に大阪医大にお見舞いに行き、中村から「同志社のために頑張ってください」と強く握手をされたことが印象に残っています。中村遙の座右銘は「努力は人間を創る」でした。彼は理想主義と現実主義をうまく調和させて、彼の信ずる唯一筋の道を歩み通した七十三年間でした。それは彼の信仰に支えられた使命感に貫かれた生涯でした。

底辺に向かう志

まとめをします。新島襄は「同志社大学設立の旨意」で、同志社は「良心を手腕に運用する人物」の育成を目指すと申しました。そして授業や説教では「社会事業は神の委託事業である」と繰り返し申しました。生徒・学生の精神と品行を陶冶（とうや）する、活力あるキリスト教主義を徳育の基本とする同志社の諸学校では、あらゆる機会にマタイ伝五章一三節の「あなたがたは地の塩である。あなたがたは世の光である」と説いています。目立たないで人のためになる灯台やロウソクの光のように、闇の夜に輝き、暗き道を照らして人びとを助け、導きなさいと言ってきました。これが同志社の伝統なのです。同志社から内閣総理大臣が出るのもいい、しかし世界で困っている人たちに手を差し伸べる「底辺に向かう志」をもった人びとがこの同志社からどんどん生まれることが、今、強く求められているのではないかと思います。ご清聴ありがとうございました。

二〇〇七年十一月八日　同志社スピリット・ウィーク「講演」記録